

# 現代の観光における「まなざし」の非対称性 —タイの山岳民族「首長族（カヤン族）」の観光化を巡って—

須藤 廣

- I 産業化された「観光」に内在する問題
- II タイの山岳民族カヤン族の観光化
  - 1 タイの「首長族」カヤンの現状
  - 2 難民キャンプから連れ出された「首長族」カヤン
  - 3 ミャンマーから「出稼ぎ」に来る「首長族」カヤン
- III 結論

## <要旨>

観光地は非日常性を求める観光客と日常性を生きる住民との交換関係で成立している。前近代においては具体的で互酬的であった観光客と住民の関係性は、近代以降の観光においては観光商品として一般化された取引の中に解消され、民族文化や風習その中での人間関係までもが消費の対象となる。タイの「首長族」の観光化はその特徴を典型的に持ったものとして理解できる。このような現代観光文化における「まなざし」の非対称性を十分理解した上で、本来あるべき観光客と住民の相互的なコミュニケーションのあり方の再構築が求められている。

## <キーワード>

観光のまなざし (Tourists' gaze)、非対称性 (imbalance of power)、首長族 (カヤン族) (Kayan)、観光地住民 (local people)

### I 産業化された「観光」に内在する問題

観光を研究する者の多くは、観光は祭りにも似て「日常」生活からの一時的な離脱と、非日常体験によって特徴づけられる行為であると言う[Urry,1990,Graburn,1989:24-31]。観光客は観光地において、一日から数日（ロングステイ旅行では長期に渡って）非日常的日常を過ごす。その間観光客にとっては、観光地の日常の景観や風俗でさえ珍しいものとして映る。そして、観光地の住民は、観光客が自分たちの日常に「非日常」的まなざしを投げかけていることを知っている。すなわち、およそ観光地というのは、観光地住民にとっての日常性が観光客にとっての非日常性であり、そのことを観光地住民も受け入れることによって成立している。

江戸時代、伊勢参り客が行き交う街道筋の住民は、おかげ参りの参拝者たちに食事、衣料、宿ばかりかお金まで喜捨した。旅人が民間の住居に泊めてもらうこともよくあったことである[神崎,2004:61-65]。旅人に寝床を提供した者もまた、旅人として他所で宿を提供してもらったはずである。ある者にとっての日常が、別の者にとっての非日常になり、時にまたその立場は入れ替わる。観光客と観光地住民における、こうした日常と非日常の互酬的交換行為こそが、前近代における観光の原点であり、近代になり観光が産業化されてからも、観光における「ホスピタリティ」の理想として理解されてきたものである。

もちろん、こういった日常と非日常の互酬的交換のモデルが、すでに貨幣経済が浸透した江戸時代（特に中期以降）の巡礼客とそれを受け入れ街道筋あるいは巡礼地住民に、必ずしも理想的に成立していたわけではない。特に江戸時代も中期以降には、伊勢参りも御師という神官兼観光業者によって組織化されてきており、参宮観光の非日常性も業者によって人工的に作り出したものになっていた。例えば、伊勢参りを迎い入れる御師の邸宅における接待等も、巡礼客の非日常性を演出する仕掛けに満ちあふれていた〔相蘇1996:80-86, 神崎,2004:41-60〕。しかし、御師という神官兼観光業者がいかに「金儲け」に勤しんでいようとも、あくまでも神官という文化的優越性は保っていたし、街道筋の業者や住民がどんなにあざとい商売人であろうとも、観光客との文化的対等性は、少なくとも建て前としては、保たれていたであろう。平たく言えば、この時代においては、観光地の文化は住民にとって誇り高きものであり、観光客との関係は互酬的で立場の転換が可能なものであり、少なくとも一方的に見られる客体としての「見せ物」ではなかった。

観光地が観光客に一方的に見られる客体として相互性、互酬性を失うのは、近代になり観光地が産業化されてからのことである。観光の産業化のなかで、観光地の景観や風俗は、観光客に観察されるべき一つの商品となる。それらの商品は客の望む規格に合わせて再編成される。客の期待する観光商品のイメージが、近代の複製技術によって旅に出かける前にすでに形成され、旅はメディアによってあらかじめ与えられたイメージを確認する作業、「疑似イベント」と化す〔Boorstin,1962=1964:89-123〕。また、観光地の産業化が近代の視覚中心主義を伴っていたこともまた、このことを強化していた。フーコーを引き合いに出しつつアーリが言うように、近代人が身につけたのは、対象と自己との不可視の関係ではなく、対象を可視的世界の客体としてのみ理解する「鑑識眼（connoisseurship）」というまなざしであった〔Urry,1990:147〕。こういった視覚中心主義が観光に入り込んだのは、科学的「鑑識眼」のみによってばかりではなく、近代の「鑑識眼」の大衆化バージョンであるカメラ、ガイドブック、スケッチ、バルコニー、観光地図の発明によってでもあった。さらに、鉄道や観光バス等の輸送機器の発明も観光の視覚化と観光景観の客体化を後押ししていた。レシュブルクの指摘にもあるように、鉄道旅行の経験は、車窓の風景をパノラマ化し、風景から近くの物体、そして外界全てから匂い、音、共感覚を奪っていったのである〔Löschburg,1997:71-73〕。近代観光地には必ずといっていいほど存在する「～タワー」のような望遠施設は、観光地全体を一方的に眺望し、風景を「所有する」という、観光地を客体化する行為にもとづいている。

こうして、産業化された近代の観光は、以前あったはずの経験の相互性を喪失し、観光地は一方的に見られるだけの客体へと転化してゆく。このような近代観光の産業化の日本的例として別府をとりあげて見よう。重信によれば、別府の近代的組織的観光化の端緒は1920年代の遊覧バスシステムの発達に見ることができるという〔重信、2000:25〕。古くからの湯治温泉地であった別府は、1920年代に次々と開通した鉄道網によって急激に観光客を増加させていた。前近代の湯治客の旅とは質的に異なる合理性を期待する新しい観光客向けに、日本で初めてのバスガイド付き遊覧バスを亀の井自動車が走らせたのは1928年（昭和3年）のことである。このバスガイドの解説付き遊覧バスは、田園地帯に点在していた「地獄」（源泉が地上に吹き出しているところ）をバスガイドの語りで演出しつつ結ぶものであり、客にとってそれは窓の外側に移りゆくパノラマを一つのストーリーとして経験するシステムであった〔重信,2000:30〕。重信も強調するように、視覚を聴覚で補うこのパノラマ物語バスのシステムづくりには、観光地住民も大いに「乗って」いったのである。そしてそれは、観光地が観光客によって見られる客体（商品）であることをはじめから意識してのことであった。次から次へと「地獄」は「発

見」され増殖していった。既存の「地獄」も差別化をせまられ、さらに過剰な演出することにより売れる商品へと装いを変えていく。中にはインドネシアから連れてきた鰐を温泉の熱で飼育し、演出の道具とする「地獄」(鬼山地獄)まで現れた(現在でも同様の演出で存在している)。バスガイド付き遊覧バスのシステムは、バスによる遊覧の効率性の増加と、「地獄」所有者市民による、車窓のパノラマを演出するストーリーの増殖とを重ね合わせることによって、湯治場という客と住民の具体的で互酬的交換の場であった別府の空間を、一般的商品としてのイメージ空間へと積極的に再編成していったのである。

もちろん、一方的に「見られる」商品作りとしての近代観光地の開発が、反省されなかったわけではない。別府のすぐ隣の湯布院温泉や安心院では、視覚重視の観光から体験重視の観光へ、一方的にサービスを受ける観光から、相互交流型の観光へ、新しい試みも行われている。しかし、このような試みも、観光がサービス商品である限りには、あくまでも新しい観光商品開発と販売の企業(地域)戦略という枠組みから抜け出すことは原則的にはあり得ない。この手の商品は「見られる」ことが中心であっても、それだけではない付加価値が付け加わり、商品の質が向上している。しかし、そこには擬似的な相互交換のシステムは存在するものの、一般性と流通性の向上(安心院のグリーン・ツーリズムはそこから抜け出す努力をしているが)を目指す商品であることは基本的には変わりはない。このような新しいツーリズムのひとつであるエコ・ツーリズムでは、自然と人間の互酬的交換の原則を通せば、入山制限等を余儀なくされ、そのことが価格を上昇させ、大衆の手の届かない高級商品となる。あるいは価格を低く抑えれば収益を圧迫し、ついには撤退に追い込まれるケースも多い。

さまざまなバリエーションが存在し、近代の「見せ物」的観光から脱皮したように見える現代の観光も、やはり互酬的で具体的な交換システムを持たない、一般的なイメージ「商品」(視覚に体験がプラスされてはいるが)であることによって成立していることには変わりはない。たとえそこに人間的交流が存在する場合でも、交流の人格性は具体的なものとしてではなく、対価が前提の抽象的なサービスとしてとして意味を持つものである。交流も「商品」としてシステム化されていけば、当然売る側と買う側が交わる現場において、非対称性を伴う。

ただし、こういった問題は、現代の日本の観光のような高度にシステム化されたところでは、オペラートに包まれ、あるいは習慣化したサービスのなかで「あたりまえ」のこととされ、前景化されることがない。しかし、人間的交流に民族やジェンダーが絡む場合、あるいは売る側と買う側に経済的格差がある場合、この問題はあからさまになる。また、こういった条件が多く存在するのは、観光が産業として発展途上の地域であることが多い。本稿において筆者は、タイの山岳民族に焦点を絞り、近代(現代も)観光に潜在する売る側と買う側の「非対称性」の問題について考えたい。

## Ⅱ タイの山岳民族カヤン族の観光化

### 1 タイの「首長族」カヤンの現状

タイの山岳民族カヤン族の観光化の実態と問題点を探る目的で、筆者は2006年9月末、筆者はメーホーソン地区において3つの村、チェンライ・チェンマイ地区において2つの村で聞き取り調査を行った。特にメーホーソン地区においては、フアイ・スア・タオ(Huay Sua Tao)の村において民家に宿泊し、村民の生活を観察した。以下、この調査にもとづき、カヤン族を中心にタイの山岳民族の観光化の問題点について述べる。

タイには現在12部族約百万人の山岳民族がいると言われている(タイ政府も実数をおさえていな

い)。これらの多くは18世紀から現在までに、漸次ミャンマーや中国から移住してきた人たちの子孫であるが、特に1980年代以降のミャンマーの軍事政権とカレン族やシャン族の民族解放戦線との間の闘いにより、ミャンマーから難民として流入してきた民族(部族)の人口比率が高い。そもそも、タイとミャンマーの国境線は特にフェンスがあるわけではなく、時々タイ国軍の国境警備隊が警備している程度であり(現在では不法入国の取り締まりはかなり厳しくなったと聞くが)、生活の必要上の越境は現在でも認められているようである(賄賂が必要だという話もある)。おそらくミャンマーからの難民が溢れた1980年代以前においては、ミャンマーとタイの山岳地帯における山岳民族の往来はかなり自由に行われていたのではないかと推測される。

カレン族の支族であるカヤン族は、1980年代におけるミャンマー内戦の煽りを受けて、ミャンマー東部(多くはカヤKhyā州、シャンShan州)から逃れてきた難民である(カレン族の中には、それ以前からタイに住んでいた支族も多い)。カヤン族の人口は現在7,000人程度でありという(Union of Hill Tribe Villages Chiangrai のパンフレットによる)がその内のどの程度がタイに逃れたのかは定かではない<sup>注1</sup>。その多くはミャンマーとの国境付近の町メーホーソンの周辺に住んでいるが、近年チェンマイ、チェンライ近郊の観光村に「出稼ぎ」として短期で滞在している者も多い。当初、彼ら(「出稼ぎ」組は除く)は国境沿いのナイソイ(Nai Soi)にある難民キャンプに住んでいたのであるが、1990年頃から首長族の言われるカヤン族と、耳長族と言われるカヨー(kayo)族(同様に耳長族であるが、耳の伸ばし方が異なるカヤー族を別の部族とすることもある)のみが、タイ政府の命令で難民キャンプの中から外に出され、人工的に作られた三箇所の観光村に移り住むようになった。この二つの部族が観光村へと移された理由は、カヤン族の女性が首に真ちゅうのコイル状リング(重いもので9kgにもなり、多くは腕や足にもリングをつけている)をつける習慣があり、首長族(giraffe又はpadong)として知られていたことである。また、カヨー族、カヤー族の女性は耳に穴を開け耳たぶを伸す習慣があり、耳長族(long ear又はbig ear)として知られていた。すなわち、彼らは「視覚的に」目立ち、観光客のまなざしに留まりやすいが故に、他の難民からは区別され、引き離されて観光村へ移住させられたのである。観光村の営業主体は、タイ人の民間会社である事以外どのような法人であるかは、カヤン族の者もはっきりとは知らないが、軍、入管あるいは警察の関係者が始めたものであろうと密かに言われている。また、移住の見返りとして何らかの生活費が保障されているのであるが、そのことについては後述する。

以上説明したように、タイのカヤン族は基本的には難民なのであるが、彼らが観光村の「見せ物」として「脚光」を浴びると、ミャンマー側にいるカヤン族の中には、観光業者に手引きをされ「出稼ぎ」としてタイの観光村に自ら赴く者も現れるようになる。現在タイには、「難民」と、「出稼ぎ」の二種類のカヤン族がいる。人口が多いのは前者であるが、後者も次第に増え無視できない。筆者は両者に対してフィールド調査を試みた。以下、調査にもとずき、二種類のカヤン族について順に述べたい。

## 2 難民キャンプから連れ出された「首長族」カヤン

筆者が宿泊したのは、このうちの一つであるファイスアタオの村である。メーホーソンから20kmほど山奥に入った所にあり、ミャンマーとの国境が近い。道は舗装されてはいるのだが、雨期である夏場にここまで行くには、何本も橋のない川を渡らなければならず、また大雨の後は道自体が川になる。したがって、特に4月から10月の雨期の移動手段には四輪駆動車が必要になるのだが、それでも、この村が他の二つの村に比べて一番アクセスがよいため、メーホーソンを訪れる観光客の多く



ファイスイタオの村

は、四輪駆動車を使ったツアーでこの村を訪れる。観光客は村の入り口で一人250バーツ（1バーツ約3.3円）の入場料を支払う。この村は、別の既存の山岳民族の村に、小川を隔てて隣接しているが、既存の村にある電気はこの村にはないために、夜は文字通り真っ暗になる（しかし、この村の三軒の家だけは隣の村から盗電しているので電気があり、テレビも見ている）。観光客は小川にかかる橋を渡りカヤン族の観光村に入る。村のメインストリートに

は両側には土産物屋が軒を連ねる。ここで売られている小物の多くは村人達の内職で作られたものであるが、タイ人の業者が納入するものもある。自作の歌をCD化し、ギターの弾き語りをしながら売っている若い女性もいる。女性は極めて働き者であり、多くは機織りができ、織られたものはそのまま売られてはいるのだが、首に真ちゅうのリングを巻き付けた女性が機を織っている姿自体が一つの商品であり、観光客のカメラのレンズが向けられる被写体として役立っている（村外で写真を撮られるとチップを要求されることが多いが、村内ではチップ自体が入場料の中に入っていると考えられている）。村民は原則として、村周辺から出ることが許されていない。女性は、土産物作りの内職か、土産の売り子として働いている。この村にはほんの少しのトムロコシ畑があるのだが、男性は家の補修や、このわずかな畑仕事以外にやることがない（バイクを所有している者も多く、バイクで買い出し等には行っているようだが、時間を持てあまして見受けられる者も多い）。

この観光村の一番の「見せ物」である、「首長族 (Giraffe)」(よく使われる「パドゥン族 (Padong)」はGiraffe同様「首長族」の意味であり蔑称である)の女性たちは真ちゅうのリングをつけることを「強制」されているわけではない。真ちゅうのリングを女性たちがつけるようになった理由については諸説あるが、三つの観光村の入り口の案内板には、部族の印として他の部族と区別するため、また女性が誘拐されたときに自分たちの部族の者であることをはっきりさせるため、首輪が一つの宝飾品であるため、母なる竜(シー)の子孫であることを表現するため、単に美意識から等の理由が掲げられている。一部言われているような、満月の月に生まれた女の子のみがリングを強制されるという説 [Higham,2000:134]は誤りであるという。多くの女性たちは5, 6歳になると、首にリングをつけるかどうか本人の意志も聞きながら親が選ぶ。しかし、この村では原則として、首輪をつけた女性には一人一ヶ月1,500バーツ（1バーツ約3.3円）が支払われることになっているため（入場客数が一ヶ月500人に満たないと支払われない）、実際にはほとんどの女性がリングをつけている。リングをつけた女性以外には、政府から食料費として一人一ヶ月250バーツが支払われている。このため、例えば娘が3人いる家族は、母親の分も含めて一家族で日本円にして2万円程度の生活費が保障されていることになる。この額は家族が全員健康でいる限り（難民には医療保険が適用されないため家族に病人が出ると大変な事態になる）、タイの山岳地方で生きてゆくだけならば、そこそこ十分なものである。しかも、みやげ物屋を営んでいけば一日50バーツから800バーツもの売り上げがあり（店によって、日によって大きく異なるが）、他の悲惨な山岳民族の村に比べて、この村は経済的には恵まれているとも

言える。もちろんこういった経済的理由も女性が首にリングを巻く大きな動機になってはいると思われるが（ミャンマーにいるカヤン族の若い女性が近年真ちゅうの首輪をあまり付けなくなったにもかかわらず、タイのカヤン族女性はほとんど首輪をつけていることから「経済的動機」も否定しきれない）、彼女たちは主観的には真ちゅうの首輪に大変誇りを持ち、伝統的な美意識にこだわっていることも筆者の数々のインタビューからも確かめられた。しかし、これらのことと、首輪をつけた女性が「見せ物」になることによって得られる経済的な保障を、彼らがどのように評価しているかは別の問題である。このことについては後で議論することになる。

筆者が民泊した家族は、村のメインストリートに、飲み物とおみやげもの屋の店を持つ木の柱と竹を編んで作った壁でできた二階建て高床式の家である。一階部分が店と台所、トイレ、水浴び場となっている。二階部分はテレビがおいてあるバルコニー式の居間と個室が3つある。私には一つの個室（本当は難民キャンプの高校に通うためにキャンプ近くの別の観光村に住んでいる娘の部屋である）が与えられた。この家族を仕切っているはマノアという細身であるがしっかりものの母である。この家族は16年前に内戦の続くミャンマーから7日かけて山伝いにタイへと逃げてきた。当初3年間はナイソイにある難民施設にいたのであるが、1993年にタイ政府から移住を命じられ、ここフアイスアタオの観光村にやって来た。タイに逃れてから間もなくマノアの夫は7人の子どもを残して病気で亡くなった。マノア（カヤン族には姓がなく、女性は全員M、男性は全員Lで始まる名のみ持つ）はこの家で4人の息子と3人の娘、計7人の子ども達を女手一つで育て上げた。カヤン族は原則として結婚すると家を出る。また、高校が難民キャンプ内にしかないため、高校生は難民キャンプに近いナイソイの観光村の親戚の家に住む。従って、現在この家に住んでいるのは母のマノアと21歳の息子のラターとその妻（妊娠中）であるタイ人ジェーンの3人である。24歳になる長女のマロが道を挟んですぐ前の家に嫁いでおり、マロもこの家にいることが多い<sup>注2</sup>。この村には26家族、約120人の村民がおり、うち38人の女性が真ちゅうの首輪を付けている（村民のなかには少数であるが耳長族であるカヨー族もいる）。村民は、原則として外に出られないことになっており<sup>注3</sup> 村民はみなよく協力しあって生活している。それぞれの家には家族以外の者がいるのが常であり、マノアの家でも夕方から夜にかけては、数人の村人やタイ人の観光業者等が集まり、地酒を飲み、ギターに合わせて歌を歌っていた。マノアは自分を慕って人が家に集まることを歓迎しているようであった。

この村の人々の生活は、基本的には観光客の被写体になりながら、みやげものを売ることが中心であり、それ以外は、観光客が引けた夕方以降（5時頃には観光客は誰もいなくなる）に村民が皆で遊んだり、歌を歌ったり、飲みながら話をしたりして過ごす（若い村民はみな恋愛を楽しんでいるようである）。この村には独自の小中学校がなく（他の二つの観光村には、海外のNPOからの援助を受けている自前の小中学校がある）、小中学生は村外の学校まで歩いて通っていて、他の民族の子ども達と一緒に勉強している。宗教はカヨー族のみがキリスト教化されているが、カヤン族のほとんどは未だにアニミズムを信じており、家の中には日本の神棚によく似た神棚がある。

村人たちは協力し合って生活しており、観光客が比較的多く訪問するこの村に限っては、あまり生活に困窮している様子は伺えなかった。ただ、医療費について、500バーツを超える場合には自己負担になるし、出産等も自費で行わなければならない。但し、このような突然の出費の時はお互いに助け合っているようである。この村においては、問題は他のことがある。

村人たちが口々にいう不満の多くは、移動や労働の自由等、タイ人に認められている基本的な自由が彼らにないことである。彼らは基本的には難民であることから、タイ政府は彼らに移動や労働の自

由を与える必要はないという立場である。彼らの多くはミャンマーで生まれた者であるため彼らには村内に住むための許可証しか与えられていない。一部タイ国内に長く住んでいるものや、タイ生まれのものにはグリーンカード(居住権であるが、これにも何種類かがある)が与えられてはいるが、特別の許可を得ない限り、グリーンカード保持者であっても、移動の自由はやはり地域内(メーホーソン県内)に限定されているようである。彼らは難民であるにもかかわらず、難民としての地位も極めて不安定である。彼らは難民キャンプから出てしまっているがゆえに、国連から難民の認定を受けることができない。他の国から難民の受け入れの申し出があった場合、それが難民キャンプ内にいる約三万人の難民に適用されることがあっても、彼らに適用されることはない。すなわち彼らは、タイ人としてはもとより、タイに住んでいる外国人としての権利を持つべき対象にも、また、難民としての国際的な保護の対象にもなれないのである。

筆者は、他のカヤン族の観光村にも行って見たが、他の二つの観光村はこうした自由の剥奪に、首輪を巻いた女性への給料の未払いという経済的な打撃がのしかかり、絶望的な空気が村中を支配していた。特に船に乗らなければ行けないナンピンディン(Nam Piang Din)の村は悲惨な状況にあった。カヤン族とカヨー族合わせて56家族約300人が暮らすナンピンディンの村では、夏場の雨期には観光客が少なく、入場料収入が規定(一ヶ月600人以上)に達しないため、首輪をつけた女性に対する給料(この村では大人の女性が月2500バーツ、子どもが月1000バーツ)が3ヶ月間支払われていなかった(一人につき250バーツの生活費のみは支払われていた)。さらに、村内にある小中学校(自力で建てて運営している)の教員の給料も3ヶ月間支払えない状況にあるという。さらに昨年は一年間に59人の村民がマラリアを罹ったという(医療費がかなりかかったことが推測される)。



ナイツイの高校生(一番右の少女は自分の意志で首輪をつけない)

筆者は、民泊先のマノアの娘で難民キャンプの中の高校に通う高校生のマチョに会うために、マノアとともにナイツイの観光村を訪れた。メーホーソンから国境近くのこの村に行くのも、苛酷な道のりであった。道の舗装は途中で途切れ、池のような水たまりが行く手を遮る。私たちの乗った日本製四輪駆動車は何本かの川をタイヤの上まで水に浸しながら走った(途中で停止したら岸に戻ることすら難しいであろう)。村の入り口にある監視所(兼入場料徴収所)でゲートの停止バーを上げてもらい村の中に入る(通常入場料250バーツを徴収されるのだが、我々は入場料を取られなかった)。お昼近い時間であったが、村内にはほとんど観光客の姿はない。雨期には特にアクセスが悪いこの村は観光客に敬遠されていた。村民への給料支払いも時々滞りがちだという。この村には45家族約200人の村

民がいるのだが、半分以上は高校生も含めた子どもたちであり、特にこの村から歩いて一時間のところにある難民キャンプ内の高校に通う高校生（他の村の近くに高校がないため、親戚の家に下宿して通っている者も多い）が多い。難民キャンプ内の高校では海外のNGO派遣の教師が多いため、英語が多く使われていて、高校生の多くは英語をかなり流暢に話す。英語を使うことができる高校生たちは口々に自分たちの置かれている状況の非人間性について訴えていた。ここでは、英語を学習することのなかに、西欧的人権意識の学習も含まれていることがわかる。

高校生たちも含めて、英語を話すことができる村民の多くは、この村の存在自体の非人道性を訴え、もといいた難民キャンプに戻して欲しいと考えているようであった。現在、この村とファイスイタオの村を、船で川を上って行かなくてはいけないナンピンディンの村に統合する計画があるという、そうすると高校生が学校に通えなくなることもあり、この村の住民たちの多くは、難民キャンプへの帰還を望んでいるようであった。

### 3 ミャンマーから「出稼ぎ」に来る「首長族」カヤン

タイのカヤン族のなかには、主に1980年代に難民としてミャンマーから逃れてきた難民の他に、最近チェンマイやチェンライ近郊にできた観光用の「山岳民族村」(「eco-agricultural village」のように「エコ・ツーリズム」を標榜している名前が多い)に「出稼ぎ」としてやってきた者も多い。筆者は、その中の一つであり、チェンマイ県メアイ地区 (Mae Ai district)にある三部族ヤッパ村(Ban Ya Pha Village)を訪れた。この村は、7年前の1999年に観光用に作られたものであり、アカ族とラフ族とカヤン族(カヨ族も同じエリアいる)の住む三つのエリアからなる。村内に入ると、道の左右に土産物屋が並んでいて、客引きが寄ってくる。一番手前がアカ族のエリアであり、続いてラフ族の住むエリアがある。そして、ラフ族エリアを越えるとゲートがあり、ここで250バーツを支払う。そして細かい山道をしばらく進むとカヤン族、カヨ族の住むエリアがある。このアカ族、ラフ族はかなり前(ラフ族の一人に聞いたところ30年前)にタイに移住してきた人たちが、ここにさらに移住したのらしいのだが、カヤン、カヨ族は、前二者とは違い、新しくミャンマーから「出稼ぎ」として連れて来られた人たちが主である。しかし、中には前述したメーホーソン近郊の三つの村から非合法に連れてこられた者もいると言う<sup>注4</sup>。この観光村のこのエリアには9家族(うち一家族はカヨ族)40人(内28人が女性)が住み、大半は労働許可書(working permit)を持っているようであるが、若者の中には持っていない者もいる。労働許可書だけではこの村から出ることができないが、彼らの中の5人だけでは他の場所で自由に働くことができるグリーンカードを持っているという。ここでも入場料収入から首輪をつけた女性にだけ一月1500バーツが給料として支給されている。彼らは給料及び土産物を買った収益で暮らしている。筆者は村のこのエリアで三人の首長族の女性にインタビューを試みた。この村の住民は英語を全く話せないため、タイ人のガイドに通訳を頼んだ。

その中の一人、マロ(仮名30歳)は、5年前にミャンマーから一人でここに一度やって来た。その後ここでの生活が寂しくなって、一年で帰国。その後4年間ミャンマーの故郷で暮らし結婚して2人の子どもが生まれる。しかし、ミャンマーの生活は苦しく、7ヶ月前また思い立って夫と共に2人の子連れチェンライの北方にある国境の町メーサイまで5日もかけてたどり着き、そこからバスでこの村に戻ってきた。戻って来てから一人子どもを産み、現在家族4人でこの地に暮らしている。ここに住むカヤン族は難民ではないためマロのようにミャンマーとタイを何度も行き来するものも多い。しかし電気も水道もないミャンマーの田舎の生活は苦しく、結局彼らは、ここでの生活を選ぶ以外にな

いのである。一定の給料が支払われる観光村での生活は、ミャンマーでの生活よりはかなり楽なのであるが、医療費の負担等は厳しく、彼女がタイ国内で出産した時には、5,000バーツかかったという。

難民としてタイ国内にやってきたカヤン族のほとんどは家族単位で暮らしているが、「出稼ぎ」でミャンマーからやってくるカヤン族は家族が一団となってやってくるものばかりではない。マロのように家族単位でやって来る方がむしろまれである。若い「出稼ぎ」女性の多くは、姉妹で、あるいは一人で、国境を越えてきた者も多い。マヤ（仮名15歳）は、4年前に姉と二人でタイにやって来たが、姉は今はこの村にはいない。姉は結婚してここから少し離れたところにある別の観光村に住んでいる。マナ（仮名14歳）は4年前にこの村に一人送られてきた。彼女は労働許可書さえ持っていないので、病気になるとう治療費を全額払わなくてはならず、病院には行けないという。「家族の元に帰りたいか」という質問には、二人とも涙をにじませ、答えてくれなかった。マヤとマナ、二人ともタイに来てから全く教育を受けていない。「学校に行けるのなら行きたい」と目を輝かせてマナが言った。彼女たちは、「出稼ぎ」なのでその気になれば、いつでも帰れることになっている。しかし、帰る資金もないし、帰ってもより貧しい暮らしが待っているだけである。観光村に閉じこめられたまま、教育も受けられず、さらに家族から引き離された彼女たちは、難民組よりも悲惨に見えた。

筆者はさらにチェンマイ市の郊外にある3年前にできたという新しい観光村（トンルアン村Baan Tong Luang Eco-agricultural village）を訪れた。ここでは、村のスタッフから話を聞くことができた。村には、カヤン族、黄ラフ族、パロン族の3つの部族、70人が住んでおり、そのうちカヤン族は14人が住んでいる。スタッフの話によれば、この村は次第になくなりつつある山岳民族の文化を保護するために作られたもので、観光で儲けようと思って作ったのではない。観光客からは入場料500バーツを取っているが、あまり客も来ないため、むしろ赤字のボランティア的の事業であるらしい。この村での生活の決め事のみならず、運営の一部も各部族のリーダーを集めて相談しながら民主的に決めており、彼らは何も強制されていないと言う。もし彼らがミャンマーに帰りたいと言えば、いつでも帰れるし、労働許可もそれぞれの希望に合わせて一ヶ月ごとに更新している。ここでは、村民は農地を与えられ、収穫された農産物も彼らのものになるという。実際、昼間は観光客のために家にいる女性以外は、子どもは学校に行き、男性は農地で働いていた。4、5年前に主に欧米のメディアによって「人間動物園human zoo」と批判された観光村が、批判を一応受け止め、新しい形に進化した姿がそこにはあった。

### Ⅲ 結論

「首長族」観光は、今やメーホーソン地域の観光には欠かすことができないものとなっている。近年のチェンマイ周辺における「観光村」建設ブームを見ると、メーホーソン地域のみならず、チェンマイ地域においても観光の目玉になりつつある。そしてまた、「人間動物園」から「エコ・農村観光」への衣替えも、世界的な「持続的観光」ブームの文脈に乗った形を取っている。観光提供者が打ち出す観光の文脈は、単なる「見せ物」から「文化の保存・保護」へと変容し、観光客の観光経験も「見る」だけのものではなく「体験」も含めたものへ、さらにまた「にわか文化人類学」的な「観察」へと変化している。バンコクやチェンマイ等の都市が近代的なものなればなるほど、非日常性を求める観光客の「好奇心」は、地域の文化をより多く残していると思われる農村部へ、さらに山岳部へと、「舞台裏」を覗き見する観光の特質[MacCannell, 1973]は進化する。

しかし、ここで確認しなくてはならないのは、観光客が求めているのは「一時的」な「楽しみ」であ

り、「よく知られたもの」を「ちょっと覗く」という経験という点である〔橋本和也,1999〕。「人間動物園」から「エコ・農村観光」へとバージョンアップし演出の仕方を変えたとしても、観光客が持っている「にわか観察者」的特徴は変わらないし、観光業者や観光行政等観光提供者も観光経験の特徴を熟知して、そのように観光客を誘導している。このような観光の構造のなかでは、観光客を迎入れる住民と観光客の互酬的で具体的(特殊的)な相互作用はあらかじめ絶たれている。筆者が一日、土産物屋の売り子をして確認したことであるが、観光客はお土産を売る首長族の女性に話しかけるかも知れないが、問いかける質問の内容はどれもみな同じであり、女性も「マニュアル通り」、一般的な同じ答えを繰り返しているだけであった。「首長族」の女性たちは屈託がなく、求めに応じ観光客に囲まれて写真に収まるが、これも入場料の対価としての一般的な「サービス」に過ぎない。そもそも、観光客が観光村に滞在する一時間程度の時間のなかでの相互作用とはこの程度のものであろう。

現代の観光にあっては、観光の対象の脱領域化が著しい。従来の自然や都市「景観」観光に加えて、癒し、ノスタルジー、芸術、工場の舞台裏、農作業、廃墟、監獄、戦争、観光それ自体(別府では自らの観光の歴史が観光のテーマとなっている)等々、ありとあらゆるものが観光の対象となっている。脱領域化した観光文化によって作られたものと、そうでない「オリジナル」なものとの境界もあいまいになり、ディズニーランドのように「オリジナル」を持たないシュミラクルが観光文化の主流になりつつある〔須藤,2003,2006〕。こうした中、観光文化の「本もの性authenticity」を議論すること自体が無意味なものとなりつつある。カヤン族の人たちが大切にしている「首輪」に対する美意識さえ、かなりの部分、観光化によって養われた部分も否定できない(観光化されていないミャンマーの「オリジナル」であるカヤン族の若い女性が、今では首輪をつけていないということからも分かる)。観光化が「自意識」を呼び覚ますことも否定できず、それが「オリジナル」に照らしてかどうか議論すること自体も生産的ではない。

このような現代の観光文化の状況下において、「観光化」を免れる「聖域」を作り、特定の文化、習慣、人格的關係を観光商品とすることを禁ずるといったような「後ろ向き」の解決法は、筆者にはあまり効果的なものとは思えない。大切なことは、現代の観光文化が持っている、観光をする、あるいは観光を作る側(観光客、観光業者、観光行政)とそれを受ける側(観光地住民)との間にある、まなざしのパワーの非対称性について、目をそらさずに見つめ考え抜くことである。その上で、限定的に、現代観光における観光する側と受ける側の互酬性と対等なコミュニケーションのあり方を、具体的な場で試行錯誤しながら創り上げてゆくことであろう。このような反省的、再帰的な視点に立つてこそ、エコ・ツーリズム、グリーン・ツーリズム、文化ツーリズム等「持続的な観光」の存在意義があると、筆者は考える。

(本学文学部教授)

#### <注>

注1、現在でも出稼ぎとしてミャンマーからやって来る者もいるので実数は分からないのではないかと。

注2、難民キャンプの高校では国際NGOから派遣された教員が英語で授業を行っているため、彼らのなかには英語を流ちょうに話す者も多く、筆者にとって聞き取り作業は割と楽であった。

注3、男性は目立つ特徴がないので実際にはバイク等でかなり遠出しているようであるが、女性はほとんどが真ちゅうの首輪を巻き付けているので遠出はできない。

注4、<http://www.chiangmai-mail.com/095/news.shtml#hd4>参照

#### <参考文献>

- 相蘇一弘(1996)「御師・伊勢講・おかげ参り」『歴史の道・再発見第三巻一家持から野麦峠まで』フォーラム・A、pp80—107
- 神崎宣武(2004)、『江戸の旅文化』岩波新書
- 橋本和也(1999)『観光人類学の戦略—文化の売り方・売られ方』世界思想社
- 須藤 廣(2003)「越境する<観光>—グローバル化とポスト・モダン化における観光」遠藤英樹、堀野正人編著、『「観光のまなざし」の転回—越境する観光学』春風社、pp220-237
- (2006)「観光現象とポストモダニズム」安村克己、遠藤英樹、寺岡伸吾編『観光文化社会論講義』くんぶる、pp173-182
- Boorstin,D.J.(1962) *THE IMAGE; or, What happen to the American dream*, Atheneum, (= (1964) ダニエルJ・ブーアスティン、星野郁美、後藤和彦訳『幻影の時代—マスコミが製造する事実』東京創元社)
- Higham,James, (2000) 'Thailand: prospects for a tourism-led economic recovery' in *Tourism in South and South east Asia*, C.Michael Hall and Stephen Page (eds) ,Butterworth-Heinemann,Oxford,2000,pp129-143
- Loschburg,Winfried.(1997) *UND GOETHE NIE IN GRIECHELAND; Kleine Kulturgeschichte des Reises*, Gustav Kiepenheuer Verlag GmbH, Leipzig (=1997, ヴィンフレート・レシュブルク、林竜代、林健生訳『旅行の進化論』、青弓社)
- MacCannell,Deen. (1973) 'Staged Authenticity: Arrangement of Social Space in Tourist Settings' , *The American Journal of Sociology* Vol.79,No3,University of Chicago :589-603
- Urry,Jhon., (1990) *The Tourist Gaze: Leisure and Travel in Contemporary Societies*, London, Sage Publishers, (=一九九五,ジョン・アーリ『観光のまなざし—現代社会におけるレジャーと旅行』加太宏邦訳、法政大学出版局、年)